

# ヴェトナムにおける宣教師の役割

——神話化と歴史研究——

坪 井 善 明

## I アドラン司教について：歴史研究と神話化

ヴェトナム近代史において、一人のフランス人宣教師の特異な行動がその後のこの国の歴史に大きな影響を与えた。その宣教師とは、18世紀末に活躍したパリ外国宣教会<sup>(1)</sup>所属のアドラン司教(Evêque d'Adran, 俗名ピニョー・ド・ベーヌ Pierre-Joseph-Georges Pigneau de Béhaine, 1741-1799)である。

ヴェトナムでは、17世紀と18世紀を通じて名目上黎朝が統治していたが、実質上はハノイに勢力をはる鄭氏とフエに居を構える阮氏の二大豪族(chua)<sup>(2)</sup>が実権を掌握し、互いに覇権を争い合う、いわゆる南北抗争時代が230年間も続いていた。1765年、阮氏の武王(阮福濶)が没した時に、40年に及ぶ激動の時代の幕が切って落とされた。子の定王(阮福淳)がわずか12歳で位を継いだ、権力は摂政の張福巒の握るところとなった。張福巒は権勢に奢り、圧政を行ない人々を苦しめた。1771年、西山<sup>タイソン</sup>(現在の平定省安溪・久安地区)で阮文岳、阮文呂、阮文恵の三兄弟が、阮氏の打倒、国土の統一、黎朝の再興を旗じるしに反乱に立ち上がった。張福巒の苛政に苦しみ、阮氏政権に不満をもつ農民大衆の支持を受け、この“西山党の乱”は急速に勢力を増強していく。1776年にはサイゴン(嘉定)に逃れた阮氏を追って、嘉定に兵力を向け、遂に占領し、定王とその子ら阮氏一族を皆殺しにする。王族中でただ一人、17歳になる阮福映が西山党の手を免れ、カンボジアにかりうじて避難する。その地で、76年か77年か、同じく戦乱を避けてきたコーチシナ代牧アドラン司教と

歴史的な邂逅をみた。

阮福映は西山党の打倒と阮氏の再興を誓い、手持ちの兵力不足を補うために外国勢力に援助を求める政策をとる。近隣のタイ宮廷に軍事援助を願い、それが受け入れられ、1783年に、2万人(一説には5万人)<sup>(3)</sup>のタイ兵とともに反攻を試みる。しかし、結局、西山党の軍隊に撃破される。この当時、西欧列強の出先——カルカッタのイギリス人、バタビアのオランダ人、マカオのポルトガル人など——も阮福映に軍事援助を申し入れている<sup>(4)</sup>。敗戦後、阮福映は西欧諸国に救援を求めることを真剣に考え、マニラのスペイン人に接触するために使者を送った。この状況の下で、アドラン司教は宗教的理由からプロテスタントのイギリスやオランダを嫌い、フランスに援助を求めるように阮福映を説得しつつ、その条件作りに精力的に動きまわる。1784年末、アドラン司教は全権大使の委任状を受け、阮福映の長男景<sup>カイン</sup>(当時4歳)と少数の従者を連れてフランスに向け出発する。85年2月、仏領インドのポンディシェリに到着し、現地で阮福映支援の軍隊を派遣させるように工作するが無駄骨に終る。1787年2月に、ようやくフランスの土を踏む。5月からルイ16世の宮廷と接触し、軍事同盟条約の交渉に入る。コーチシナはインドのフランス植民地からも遠く、イギリスやオランダの妨害にあったら、交通路が遮断される虞れがある、又、極東に軍隊を派遣するには財政上莫大な負担がかかるなどを理由とする植民地省の慎重意見もあったが<sup>(5)</sup>、結局、1787年11月28日、ヴェルサイユでルイ16世宮廷を代表してモンモラン伯爵が、コーチシナ王(Roy de la Cochinchine)阮福映の名代としてアドラン司教が一種の攻守同盟条約に調印した。ヴェルサイユ条約と呼ばれるこの条約は以下のような内容を含んでいる。(1)フランス王はコーチシナ王の国土回復を助けるために、歩兵1200名、砲兵200名、インド人奴隷兵250名に一切の軍需品をそえて帆走軍艦4隻にのせ、自国の経費で派遣する。(2)コーチシナ王は主要港の会安<sup>ホイアン</sup>(ヨーロッパ名トゥロン港)入江にある小島及び崑崙島<sup>コンロン</sup>(プーロコンドル島)をフランス王に割譲する。(3)コーチシ

ナ王はフランス人だけに、商業の自由を含む通商上の特権を与える。(4)割譲された島が他国から攻撃されたり脅威を受けた場合、およびフランスがアジア、ヨーロッパの国家と交戦する場合、コーチシナ王は兵力をもってフランスを助ける。(5)コーチシナ王が国家存亡の危機に陥った時には、フランス王は(1)の条件を越えない範囲でコーチシナ王を救援する義務を負う。<sup>(6)</sup>

しかし、この条約の履行の最終責任は、現地の事情に最も詳しいポンディシエリ駐在のインド司令官コンウェイ伯爵に委ねられた。1788年5月10日、アドラン司教は景とともにポンディシエリに到着する。コンウェイ伯爵は植民地省の訓令に基いて慎重論となり、8月に現地詳査のために二隻の軍艦をコーチシナに派遣する。コンウェイ伯は阮福映の存在自体を疑問視し、アドラン司教が彼自身で“革命”しようとしていると疑う。翌年3月に軍艦が帰還し、『状況が悲観的であり、司祭の誠意を疑うに足る』という報告を行なう。<sup>(7)</sup>結局、89年4月に、最終的に政府としては軍を派遣することを見合わすことが決定された。フランス本国では、すぐ後にフランス革命が起これ、従って、条約は批准もされず死文化して放置されてしまったのである。

アドラン司教はこの後モーリス島のフランス人商人達の財政援助を得て独力で二隻の船を調達した。その船に武器、弾薬を積み、359名の水夫・志願兵を組織し、89年7月にヴェトナム南端のカモウ岬に到着した。出行以来4年8ヵ月の旅であった。その後、死亡する1799年までの10年間、阮福映の側で政治顧問、軍事顧問の役を果たした。1802年、阮福映は西山党を破り、全国を統一し、阮朝を創設して年号を嘉隆<sup>ジャロン</sup>と称した。

このアドラン司教の活動については、従来は、植民地化を肯定するメイボンなどのフランス人の歴史家たちの解釈がほぼ絶対的な定説として流布していた。すなわち、アドラン司教の軍事援助が、阮福映が西山党を破り阮朝を創設することに最大の貢献をなした、というものである。その一例として、日本語で読めるヴェトナム史に関する代表的な著作で

ある松本信広著『ベトナム民族小史』（1969）の該当箇所を見てみよう。「こうしてピニョーはフランス政府の支援を失ったが、これに失望せず自力で武器弾薬を購入し、義勇兵を募集して1789年コーチシナに帰ってきた。このころ、阮福映はふたたびシャム軍の援助を得てサイゴンを奪回したばかりであったから、ピニョーの帰来を歓喜して迎えた。ピニョーはこのときオリビエ・ド・ピュイマネル、ダイヨー、バニエ、シュニョーら多数のフランス人を同伴してきたが、彼らは要塞の建設、造船、軍隊の編成などに西洋の新技术を導入して阮福映を助けた。とくにピニョー自身はこれから以後死に至るまで、10年にわたって阮福映の側近として、有能な働きをし、その勝利にもっとも貢献した。」<sup>(8)</sup>

ニュアンスは少し異なるが、坂野教授も『近代中国政治外交史』（1973）の中の「第十章 辺境の喪失・その二、清仏戦争 第二節 フランスのベトナム侵略の由来」の箇所ですべて述べている。

「ピニョーはインドで約360名の私兵（フランス人将校、水夫、冒険家など）を組織し、二隻の商船にのせて1789年にベトナムに戻った。このフランス人部隊の援助によって、阮福映は1802年に全ベトナムを統一し、年号を嘉隆と称した。」<sup>(9)</sup>

他方、近年、ヴェトナム人研究者の歴史研究が進み、違った解釈が登場してきた。即ち、アドラン司教とフランス人志願兵の軍事的貢献度は過少評価できないが、阮福映の勝利の決定的要因ではなかった、というものである。

正統的なマルクス主義者の歴史家、ゲン・カク・ヴィエンは“西山党の乱”を農民反乱運動ととらえ、西山党支配の時期をヴェトナム史の最も輝かしい時期の一つとしており、阮朝を反動的封建王朝と規定している。従って、彼の本『ヴェトナム史』（1974年出版）の中では阮福映やアドラン司教に対する評価は非常に厳しい。

「民族の裏切りに忠実な阮福映は、タイに支援を頼むだけではあきならず、フランス人宣教師ピニョー・ド・ペーヌにも接触し、彼の忠告を

入れて、フランスに援助を求めた。……このようにして、阮福映は『鶏小屋に蛇を導き入れ』たように、フランス帝国主義に道を開いたのである。フランス帝政はしばらくして1789年の大革命によって崩壊し、阮福映への軍事援助の約束は守られなかった。しかし、ピニョー・ド・ベージュはフランス人商人や冒険家の助力を受けて、阮福映に幾らかの武器や軍事教官を送った。この援助のおかげではなく、西山党の内部のいざこざによって、阮福映は国土を再びふむことが出来た。<sup>98</sup>

著名な歴史家レ・ティン・コイは1981年に出版した本『起源から1858年までのヴェトナム史』の中で次のように言う。

「植民地化を肯定するフランス人歴史家たちは阮福映に与えたピニョーの援助の重要性を誇張する傾向があった。アドラン司教の支援が到着したのは、阮福映が嘉定(サイゴン)を完全に征服した後であり、そこでは既に行政的、経済的、軍事的再組織化が阮福映の手によって始められていた。そして、フランス人の数も極端に少なかった。ヴァニエによれば、最盛期においても、14名の将校と80名の兵士しかいなかった。」<sup>99</sup>

レ・ティン・コイは阮福映の勝利の決定要因は、一、サイゴン地方の大土地所有者たちの支持を獲得し、財政的かつ人的援助を受けていたこと。二、阮福映自身、プロパガンダを巧みに行ない敵陣営内部に亀裂を作ったり、戦意喪失させたりするという心理作戦を指導し、更にサイゴンという戦略上の拠点に効率的な行政組織や経済組織を作り上げるなど、国家指導者(homme d'Etat)としての力量があったこと。三、西山党の最高指導者阮文恵(光中帝)が1792年に急逝したこと、を挙げている<sup>100</sup>。勿論、フランス人についても忘れずに、レ・ティン・コイは『最後に、阮福映はフランス人志願兵の技術的援助を受け、それによって砲兵と海軍においては敵に対して圧倒的優位に立つことができた。<sup>101</sup>』と述べている。

グエン・カク・ヴィエンのイデオロギー的裁断はともかくとして、レ・ティン・コイのアドラン司教とフランス人志願兵の役割の評価は従来の定説より歴史研究の精度も高く、より説得的であろう。

しかし、歴史の展開は必ずしも精密な歴史研究が確定した事実に基づくものではない。その後のヴェトナムの歴史過程の中では、アドラン司教とフランス人志願兵が軍事援助を実際に行なったという歴史的事実が一つの“神話”となって機能した。この“神話”を促進した勢力は二つあった。一方は、アドラン司教と同じバリ外国宣教会に属して、ヴェトナムの地で布教を続ける宣教師たちであり、他方は、阮朝政権に反対する人々——例えば宮廷内の反対派や黎朝遺臣の旧王朝復興を志す勢力など——であり、彼らは、阮福映とアドラン司教との関係のひそみにならぬ、宣教師とキリスト教徒を味方に引き入れれば現政権を転覆することができるという夢を常に見ていた。このようにいずれの立場に立つにせよ、19世紀のヴェトナム史は、“アドラン司教の軍事援助”という神話を一つの核として展開するのである。

ここでは、19世紀前半から1850年代までヴェトナムの地で布教に従事したバリ外国宣教会所属の宣教師の行動に焦点を当て、何故、宗教活動が“アドラン司教の神話”を軸としながら、フランスの植民地化と運動していくのかを検討してみたい。

## II 宣教師と植民地化：ナショナリズムの契機

実際、宣教師が自力で志願兵を募り、武器弾薬を調達し、船を仕立てて戦争の当事者を支援するという行為は例外中の例外である。外国宣教会(1658年創立)の歴史の中でもアドラン司教が唯一の例である。通常の場合、宣教もしくは伝道とは、より地味な平和な社会活動であり、たとえ迫害を受けても殉教するという運命を信仰の名のもとに甘受するのが大多数であった。従って、アドラン司教の行為は同時代の同僚からも宗教行動と政治行動を混同するものであり、伝道の義務を忘れたものとして非難された。特に、外国に派遣される宣教師に出されるローマ法王庁の「政治もしくは世俗のことに干渉することは絶対に避け、たとえ懇請されても宮廷の安定した職に就くことは拒否すること」という訓令を無

視していると批判された<sup>04</sup>。しかし、ことヴェトナムの地にあつては、アドラン司教の事績は人々の記憶に刻印され、それが様々な立場の人々の行動の一種の引照基準ともなり、他の地域とは異なった歴史の展開の一大要因となったのである。具体的な歴史の展開を見る前に、ヴェトナムに根を生やしたカトリックの布教の特徴をまず確認してみたい。

カトリックがヴェトナム布教に相対的に成功をおさめた<sup>05</sup>のは、個々の宣教師の能力に基くものだけではない。それ以上に、すぐれた布教方法と組織の力によっていた。

第一は布教の方法である。イエズス会士のアレクサンドル・ド・ロード(Alexandre de Rhodes, 1591-1660)という稀有の語学的天才によって、17世紀中葉にラテン語とコック・グー(ヴェトナム国語, quôc ngu)で書かれた「公教要理」が出版され、更にラテン語-ポルトガル語-ヴェトナム語辞典も作られた。この二つの書物によって、ヴェトナムでの布教は大変やりやすくなった。特に、コック・グーの重要性を指摘しておきたい。コック・グーとはヴェトナム音をローマ字表記で表わし、ヴェトナム語の声調(6つある)に合わせて5つの符号を加えたものである。このコック・グーは、規則さえ覚えればヴェトナム音をそのまま字に写せるという利点をもっている。口承文学の伝統のあるヴェトナムでは一般民衆は目で読むより耳で聞くことの方に習熟していたので、漢字を暗記するよりもコック・グーの習得はより容易に出来た。漢字の読めない“無学”な農民にも、コック・グーなら“文字”を読める喜びを与えることになった。更に、コック・グーで布教するもう一つの利点は、漢字学習に必然的に付随する儒教の思想教育を避けることが出来た。従って、儒教に全く染まらない、純粹培養のキリスト教徒のヴェトナム人を育成することが出来るようになったのである。

第二は組織の優秀性にある。組織の面では代牧制と現地人司祭の養成の二点をあげておきたい。

代牧(Vicaire Apostolique)とは、しばしば「教皇代理」と訳されるが、

教皇の名代としての代牧は、定められた布教区域内の宗教行為や教会や孤児院などの経営全般について全権をもち、代牧は直接に教皇と通信する権利を有する、という制度である。いわば、教皇の直轄地をその代理人が管理するものと言えるであろう。ヴェトナムは、1846年には7つの代牧区〔トンキン（ヴェトナム北部地域）に4つ、コーチシナ（ヴェトナム南部地域）に3つ〕に分割され、そのうちの4つまでを外国宣教会が管轄した。（残りのトンキン中央代牧区とトンキン東部代牧区はマニラに根拠地を置くドミニコ会が管轄した。）

この代牧区制のもとで、各管区では現地人司祭の養成を始めた。代牧には司教(évêque)の資格をもった者が任命された。これは、司教以上の聖職者でない限り、司祭(prêtre)の任命権を持っていないからであった。代牧の監督の下で、現地人の司祭と教理問答教師(カテキスト)が学校や孤児院の面倒を見た。この現地人専門家集団の存在が、あらゆる弾圧や迫害に耐えて、キリスト教を定着させる実働部隊であった。

さて、1819年に嘉隆帝(阮福映)の死によって、ヴェトナム情勢は大きく変化する。嘉隆帝の存命中は、たとえ中国式の統治を採用し、儒教教育を受けた伝統的な読書人を官吏に任命して行政組織を運営しても、アドラン司教とフランス人志願兵の援助に恩義を感じている嘉隆帝は、領内にいる宣教師とキリスト教徒には穏便な政策をとり、弾圧や迫害は一切行なわなかった。後継者は長男<sup>カイン</sup>景が1801年に早世したので、嘉隆帝の第4子の阮福咬が帝位を継いだ。即位後、年号を<sup>ミンアン</sup>明命と称したので、明命帝と呼ばれる。明命帝は幼少の頃から儒教教育を受けた皇子であり、中国式統治の完成をめざし、キリスト教に対して厳しい態度をとった。1825年には宣教師の入国禁止令を発布した。しかし、当時嘉定城総鎮であった黎文悦(レ・ヴァン・ズェット Lê Van Duyet)は有能な軍人として知られ、アドラン司教と共に戦った戦友でもあったことでキリスト教に好意をもち、宣教師やキリスト教徒を庇護し、明命帝の反キリスト教政策に反対していた。黎文悦は嘉隆帝の崩御の前には景の息子を後継者

に推していた。1832年に黎文悦が死亡すると、明命帝はキリスト教の弾圧を開始し、さらに黎文悦を死後裁判にかけ有罪となし、サイゴン城の城門の外で死体に首枷をし、杖打100回を行なった<sup>66</sup>。この仕打ちに怒った養子の黎文儂(レ・ヴァン・クォイ Lê Van Khôi)が33年5月に兵を挙げた。儂は景の子孫を皇位につかせることを要求し、キリスト教徒に戦列に加わるように呼びかけた。明命帝の弾圧から身を隠していたマルシャン神父(Le Père Marchand, 1803-1835)をサイゴン城に招き入れ、多く<sup>67</sup>のキリスト教徒とともに明命帝の軍隊と戦った。この反乱も、黎文儂が病死か毒殺か不明だが、34年12月に急死したことによって、35年9月には鎮圧された。幾人かの歴史家は、マルシャン神父がアドラン司教と同じような役割、つまり、明命帝を打倒し、景の息子と称する者を王位につけ、ヴェトナムをキリスト教国化しようと意図した、と主張し、宣教師の歴史家たちはそれを否定している<sup>68</sup>。真偽はともかく、マルシャン神父は逮捕され、反乱罪の罪状で凌遲の刑(手足を切り落としてから死に至らされる処刑法)にかけられた。明命帝はこの反乱にキリスト教徒が加担したとみなし、宣教師やキリスト教徒が単に儒教道徳と原理的に対立する宗教上の思想を持つだけでなく、政治的にもヴェトナムの政治権力を脅かす勢力であると認識したように思われる<sup>69</sup>。これ以後、帝は鎖国令とキリスト教禁止令を発布し、厳しく宣教師とキリスト教徒を“迫害”した。33年から38年までに処刑された宣教師の数は7名にのぼった。この明命帝の反キリスト教策に対して、1839年8月、ローマ教皇グレゴリー16世は、コーチシナとトンキンで迫害を受けているキリスト教徒に向けての特別な励ましの教皇書簡を発表した。更に、教皇庁は迫害に対抗するために伝道組織を強化・発展する政策をとり、コーチシナ、トンキンの代牧区を分割し、従来4つだったものを1846年までに7つに増強した<sup>70</sup>。

この時点まででは、パリ外国宣教会の側でもフランス政府に介入を求める動きも、又、7月王政のルイ・フィリップ政府も迫害を理由にヴェトナムに介入する意図も全くなかった。“迫害”はもっぱら宗教上の問題

として、教皇庁と当事者の外国宣教会とドミニコ会が対処していた。

しかし、1839年からイギリスと中国との間で戦われたアヘン戦争がヴェトナム情勢にも大きな影響を与えた。1840年からルイ・フィリップ政府の外相になったギゾー (François Guizot, 1787-1874) は極東問題に関心をもち、英国との対抗上、《フランスの香港》となる補給基地を中国海域で真剣に捜し始める。海軍士官たちも、戦略拠点としてヴェトナムに強い関心を払うようになる。他方、明命帝も、イギリス軍に脅威を感じ、イギリス、フランスの意図と国力を探るために、1840年末に使節を両国に派遣した。キリスト教に対しても、たとえ宣教師を逮捕しても処刑はせず、長期拘留するか、国外追放処分にするというより穏便な措置に変更した。

明命帝は1841年に歿し、長男の阮福暉が問題なく皇位を継ぎ、年号を紹治と称した。紹治帝は明命帝のキリスト教禁令を撤廃はしなかったが、實際上穏健な政策をとり、在任中一人の処刑も行なわなかった。

1842年、紹治帝治下のヴェトナムで逮捕され、フエの牢獄に繋がれている外国宣教会所属の二人の宣教師、ミシュ (Jean Miche) と デュクロ (Pierre Duclos) が宣教師として初めてフランス政府に介入を求める次のような手紙をマニラのフランス総領事宛に送った。

「……我々は同僚の首が落ち、フランス人の血が大量に流されるのを見てきました。しかし、我々は神の御加護のみを祈り、その他の援助を懇願したことはありませんでした。宣教師は今まで一度たりとも寛大な祖国、フランスに哀訴したことはありませんでした。しかしながら、現在沈黙は罪だと思われます。人権 (le droit des gens) を庇護するということがフランス人だけを例外として世界中の人々にあまねく適用されるものなのか知りたいのです。祖国を遠く離れたフランスの子らが、一人の暴君にもてあそばれるために、自己の生れを隠さなければならぬのでしょうか。すぐに切れるであろう一本の細い糸によってしか、もはや生命を長らえることができない今の状態でも、我々を待ち受けている運命について我々は全く後悔はしていません。我々が当

然受けることができるのに享受していない救援をお願いするのは我々のためではありません。フランスの名において、我々のすべての同胞の利益のために、それを願うのです。この願いが国王の許に届き、我我を悩ませ、我々を生贄にしているこの不義が終わることを！」<sup>60</sup>

1847年、紹治帝が在位7年足らずで崩御すると、その後継者をめぐって、一種の宮廷革命がおこった。長男の洪保を差し置いて、異母弟の洪任が宮廷内の有力者張登桂等の後押しによって皇位に即き、年号を嗣徳とした。洪保は謀反を画策し、カトリック教国にすることを約束して、キリスト教徒に接近した。コーチシナ東部代牧区のペルラン神父は1848年に次のように報告している。

「洪保は出生の権利によって彼に来るはずだった帝位を取り戻す手段を数回にわたって捜していた。そして彼が特にキリスト教徒を自己の陣営に取り込もうと、宣教の自由を約束するばかりでなく、この国を彼の影響力でキリスト教国にしてしまうことまで提案したのを知っている。私はこれらの約束がどこまで本気なのかは知らない。私のところに数人の信者がこの件について話があると、やってきた。私は彼らに神様とマリア様だけに任せておけばよいと答え、彼らが政治問題に手出しすることを禁止した。」<sup>61</sup>

この動きに対して、1848年7月に、嗣徳帝はキリスト教禁令を改めて発布した。1851年1月21日、洪保がキリスト教徒の助力を得て、国外脱出を試みるが、未然に発覚し逮捕される。この事件を契機に、嗣徳帝のキリスト教弾圧が開始される。3月1日、シェフレ神父が逮捕され、5月1日に斬首刑に処せられる。翌年の同日、1852年5月1日、ボナール神父が処刑された。

この新たな“迫害”に対して、宣教師の側は、より公然とフランス政府の軍事介入を要請する。その典型的な例として、匿名ではあるが、外国宣教会の一宣教師の1852年10月付の報告を少し長いが引用してみよう。

「……今から約6ヵ月ほど前、我々の同僚の血が刀の刃の下で流れまし

た。地の果てで、祖国の誉れともなり、祖国の面目を施させる市民たち(des citoyens)に称賛すべき心遣いを示すフランス政府が、その市民たちと庇護を求める現地のキリスト教徒のために強力に介入をしようとする時には、宣教のためばかりでなくキリスト教の信仰が実行されるための当然主張すべき譲歩を要求せねばなりません。以下、すべきことを列挙します。……

……第6条、確かに、未開の国々に来て、伝道のために汗を流すフランス人宣教師は、必要とあらば血を流すことも厭いはしません。それ故、宣教師たちがフランス政府の強力な介入を望むのはひとえにフランスの宗教たるキリスト教の繁栄のためであります。というのも、フランスは宣教師が体現している国の最も誇るべき栄光としての伝道事業を保護してくれると見えるからです。異教徒を目の前にした政府の心遣いとは、聖職者に無礼を働くものには必ず罰を与えよとか、聖職者の髪の毛が一本でも落ちるのを見たら、キリスト教徒の国民(nations)にとって非常に大切な二つの感情——宗教と祖国(la Religion et la Patrie)——を侮辱するのを恐れない向こう見ずの迫害者に対して、すさまじい復讐をする、ということです。<sup>23</sup>

この宣教師の要求とほぼ同時期の1852年9月、マカオ駐在フランス公使ブルブロン公爵は、全権大使を軍艦に乗せヴェトナムに派遣し、武力を背景として交渉を行なうことを提案した<sup>24</sup>。しかし、ルイ・ボナパルトがクーデターをおこしてナポレオン3世になる時期(1852年12月)の直前のフランスでは、極東に軍隊を送る状況ではなかった。フランス政府がヴェトナム問題を真剣に検討することができる余裕を持つのはクレミア戦争終了後(1855年9月)以後のことであった。

この間、ヴェトナム北部のトンキンではキリスト教徒と組んで黎朝遣臣を名乗る勢力が反乱に立ち上がる。1855年、宣教師を介して、フランスに支援を要請した。その要請の中で、もし成功すれば、一、1787年の条約を生き返らす。二、ツラーンに租界を設けるフランスと貿易を行な

う、ことなどを約束している。<sup>69</sup>

1855年12月、ナポレオン3世は休暇で帰国中の上海駐在領事シャルル・ド・モンティニ(Charles de Montigny)をタイ、カンボジア、ヴェトナムに派遣した。この使節の主目的はタイとの条約交渉であった。英国と米国との先例にならい、タイと1856年8月15日に友好通商航海条約を締結した。次に、モンティニは阮朝とキリスト教禁令の廃止、宗教の自由の保証を含む同種の友好通商条約を、数隻の軍艦の示威を背景に締結することを意図した。しかし、クレミア戦争直後で、海軍は極東に廻す軍艦が不足し、結局、1857年1月21日のモンティニが沱瀆に姿を現わした時には、予定された二隻の軍艦の内の一隻は中国に向け進路変更した後であった。沱瀆港を砲撃し条約交渉を試みたが、フランスの手の内を読んだ阮朝の強硬態度になすすべがなく、何の収穫もなく2月には撤退した。このモンティニの行動は現地の宣教師に手厳しく批判された。トンキン西部代牧区のルトール代牧は次のように言う。

「わが勇敢な同胞たちは、虎を十分に興奮させた後に、虎の爪の中に何の手助けもせず我々を放置した。単に食事をしたいだけなら、猿狩りにでも行くか、川辺を遊び半分で散策でもしたらよいのであって、遙か遠くからここに来るには及ばない。彼らは我々が要請もしないのに勝手に来て、我々を巻き込んだ後去っていった。<sup>69</sup>」

モンティニがヴェトナムで中途半端な行動をしている1857年1月、フランス本国ではラザリスト会修道士ウック(Le père Huc)が1787年の条約とコーチシナ問題について次のような意見書をナポレオン3世に提出した。

「……大革命がコーチシナを忘れさせ、条約の履行をなおざりにさせました。……今日は、1787年の条約に基いて、フランスに議論の余地ない権利があるコーチシナにおける領土を占有するのに絶好の時期です。コーチシナを占領することは世界で最も易いことで、そのもたらす結果は限りないものでしょう。フランスはそれを実行するのに十分に

上の兵力を中国海域に展開しています。住民は性格が温和で働き者で  
すし、キリスト教の福音にも進んで耳を傾けますが、恐るべき暴政の  
もとで呻吟しています。彼らは我々を解放者として恩人として歓迎し  
てくれるでしょう。この国を完全にカトリック教化し、フランスに献  
身する国にするのに、時間はかからないでしょう。」<sup>87</sup>

コーチシナ北部代牧区の代牧になったペルランこそ、ウック神父と並  
んで、フランスがヴェトナムへの軍事介入を最終的に決定させた立役者  
の一人であった。1857年5月、フランスに帰国したペルラン代牧は、5  
月21日、長文の覚書をナポレオン3世に送った。その中で、「現在の皇帝、  
嗣徳帝を廃し、カトリックの皇帝を擁立するか、もしくは少なくともフ  
ランス人の宗教に好意的な皇帝を立てることこそ、ヴェトナムのキリス  
ト教界の一致した心からの願い<sup>88</sup>」と述べ、ヴェトナムにおけるキリス  
ト教信仰の自由を守るために軍事介入を要請した。6月末か7月上旬、ペ  
ルラン代牧はナポレオン3世との謁見を許された。7月16日、第2帝政  
はヴェトナムへの軍事介入を正式に閣議決定する。11月25日、中国海域  
フランス軍司令官リゴー・ド・ジヌイリ提督に訓令を発した。しかし、  
その訓令は「迫害をやめさせ、インドシナのキリスト教徒に寛容な政体  
を保証すること<sup>89</sup>」という具体策を欠く曖昧なものであった。アロー号事  
件の処理で中国で共同行動をとっていたフランス海軍は、事件の一段落  
後、1858年9月1日、今度はスペインと共同でヴェトナムの沱瀆を攻撃  
し、ヴェトナム植民地化の第一歩をふみ出した。

1848年には信者が政治問題に手出しするのを禁止したペルラン代牧が、  
それでは何故、1857年には率先して政治権力に援助を求めたのであろう  
か。外国宣教会の一員であり、歴史家でもあるルベ神父は次のように説  
明する。

「宣教師とは言えば、政府による援助を求めたことはなかった。私はこ  
の点を強調したい。私が考える理由は次の通りである。1858年までア  
ンナンで働く宣教師は誰一人として、フランスの保護を要求しような

どとは考えてもみなかった。既に2世紀にわたり、アンナンと中国で働いてきた。数多くの迫害を受けたが、いつも忍耐と死によって勝利をおさめてきた。我々は福音をキリスト教を信じていない者に伝えるのにヨーロッパの政府の援助を必要としなかった。もっと言えば、我々は援助を望まなかった。というよりヨーロッパ政府の援助が我々の入信者に生じる疑いや憎しみの原因になるのではないかと恐れていた。では、何故、モンティニ使節以後、行動様式を我々は変えたのか。何故、ペルラン親下は1858年(原文のまま)にフランスへ行って政府の援助を要請したのか。それは状況が全く変わったからである。モンティニの慎重さを欠く華々しい威嚇によって、ルトール親下が当時書いたように、『我々に対して虎を十二分に興奮させておいて、我々をその虎の爪の中に放置した』からである。<sup>60</sup>「迫害が宗教的なものから政治的なものへと変った。キリスト教徒は祖先の祭礼を拒否し家族や社会生活と隔絶して邪教を信じる者、という単純なものではもはやなく、祖国の侵略者を招き寄せた、外国の友であり、裏切り者であり、反乱者と思なされた。」<sup>61</sup>

我々の目から見れば、ルベ神父の説明は不十分に思われる。ヴェトナム現地では、モンティニ使節の以後、確かに迫害の厳しさの程度は増加したかもしれない。しかし、迫害の性質を変えたものではなかったと思われる。ヴェトナムでのキリスト教徒の迫害は、前に見たように、明命帝治下の黎文懐の乱の時も嗣徳帝の即位にまつわる洪保の謀反の企ての時も、常に政治問題と密接に関連して生じてきており、迫害はいつでも宗教的であり同時に政治的であったからである。

質的变化がおこったとすれば、それは政治権力に対する宣教師たちの態度だったのではなからうか。政治のレベルではまず、政治権力自体もキリスト教界に対しての態度が変わった。ナポレオン3世は、大革命以降の他の政治体制と比較して、第2帝政の支持基盤の一つであるキリスト教界の要請をより聞き入れる姿勢を見せた。宣教師たちは政府をヴェト

ナムへ介入させることが出来るとふんで、より積極的なアプローチをしたのかもしれない。しかし、より根本的に変化したのは宣教師の意識そのものであったと思われる。すなわち、大革命以後に生まれ、40年代頃から一線で活躍した宣教師たちは、個人的な思惑をはなれて時代思潮に大きく影響されていた。その時代思潮とは19世紀初頭からヨーロッパを風靡したナショナリズムであった。

17世紀から18世紀末までの間には宣教師報告の中には「祖国」(patrie)とか「愛国的」(patriotique)とか「市民」(citoyen)という言葉が使用されたことはなかった。イエズス会士の例で明らかのように、宣教師は各国から来ており、国籍は問わなかった。争いは、イエズス会、ドミニコ会、フランシスコ会などのカトリックの党派間の布教をめぐる覇権争いであった。彼らの中心概念は“神”のみであった。彼らは、神の摂理の使者たる使命感に燃え、その当時のヨーロッパの最新技術を携え、非キリスト教地域に伝道に赴き、真剣に「キリスト教王国」の建設をめざしたのである。一例を見れば、1672年1月2日、外国宣教会のパリュ神父がコルベール宛に出した書簡では、あくまで「信仰の利益のため」(pour l'intérêt de la foi)であり、「敬虔なキリスト教徒の王(フランス国王を指す一筆者)の栄光の名誉のため」(pour l'honneur de la gloire du Roi Très Chrétien)にヴェトナム布教の航海上の手助けを依頼したのである<sup>62</sup>。アドラン司教にしても、カトリックの立場から、イギリス、オランダを嫌い、カトリックのポルトガル、次いでフランスを選んだ<sup>63</sup>。その理由付けは17世紀のパリュ神父と同様に、「キリスト教王国の建設=信仰の利益」と「敬虔なキリスト教の国王の栄光=政治的利益」を外在的に結びつけるものであった。

しかし、大革命以後、宣教師報告の色調は微妙に変化していく。特に1840年代以降、大革命後に生まれた宣教師たちは、たとえば前に引用したミシャとデュクロ、ルトール代收などの報告書に見られるように、「人権」、「祖国」、「市民」、「同胞」、「国民」という言葉を使った。大革命に

基本的に反対した“反動家”のカトリック聖職者たちも、時代思潮のナショナリズムから逃れ切った訳ではなかった。意識的にせよ、無意識的にせよ、宣教師の心の中にある中心概念の「神」に対して、「祖国」という観念が益々比重を重くしてくる。宣教師は一人の孤独な存在として神に立ち、「神の使徒」としての宣教をするばかりでなく、同時に「一人のフランス人市民」もしくは、「フランス国民の一人」として自己定義をしたのである。従って、異国にあって迫害を受けた時には、単に信仰による神の救いを求めるばかりではなく、人権宣言に基く一国民の正当な権利として、「祖国」に救いを求めることを躊躇なく行ないえたのである。先に引用した1852年10月付の報告書が、「キリスト教国の国民にとって非常に大切な二つの感情——宗教と祖国——」と言うように、宣教師の中で宗教＝キリスト教と祖国＝フランスは互いに切り離すことができない観念として内在的に結びついていたのである。この意識から、宣教と植民地化は何ら矛盾するものではないものとして考えられたのは当然のことであろう。

### (追)

「歴史を書く仕事に終りはない。どんな専門的研究でも新しい資料の出現や新しい研究によってたちまちアウト・オブ・デートになる運命にある。」と坂野教授は書かれている(『近代中国政治外交史』624頁)。歴史研究とは、その運命を甘受しながらも、時代の制約を明らかにして、それまでに確立した「神話」を壊し、新たな知的地平を拓くことがその任務ではなかろうか。歴史研究者にとって、先達の業績を越えること、先達の書いた説を破ること、それこそが真の意味での「恩返し」になると思う。坂野教授の偉大で緻密な業績を目の前にしながら、いつの日にか「恩返し」をしなくてはと思いつつ、ついに生前にはその思いは叶わなかった。早すぎた師の逝去に、今後の精進を誓い、心からの哀悼を捧げる。

## 注

- (1) La Société des Missions Etrangères de Paris. 訳語は坂野正高教授の使用法に従う。坂野正高『近代中国政治外交史』岩波書店、東京、1973年、343頁。
- (2) ヴェトナム史には chua (漢字はない。英訳では lord, 仏訳では Seigneur) と vuong (漢字の「王」のヴェトナム音。英訳では king, 仏訳では Roi) の区別がある。chua は覇者、vuong は王者=皇帝の意味で使われる。ヴェトナム史の文脈では、vuong (皇帝) となる要件としては、国内の統一と中国からの冊封が一般的には求められる。ここでは松本信広氏の用語を借りて、「豪族」としておく。松本信広『ベトナム民族小史』岩波新書、東京、1969年、98頁。
- (3) Nguyen Khac Vien, *Histoire du Vietnam*, Editions Sociales, Paris, 1974, p.87.
- (4) Nicole-Dominique Lê, *Les Missions-Etrangères et la pénétration française au Viêt-Nam*, Mouton, Paris, 1975, pp.23-25.
- (5) N-D, Lê, *op.cit.*, pp.30-31. Charles Maybon, *Histoire moderne du pays d'Annam (1592-1820). Etude sur les premiers rapports des Européens et des Annamites et sur l'établissement de la dynastie des Nguyen*, Plon-Nourrit, Paris, 1919, pp.227-231.
- (6) この条約の条文は、Henri Cordier, *Histoire des relations de la Chine avec les puissances occidentales 1860-1900*, 3 vols., Félix Alcan, 1901, 1902, tome II, pp.246-249 に記載されているものから訳出した。坂野、前掲書、343-344 頁を参照のこと。
- (7) N-D, Lê, *op.cit.*, pp.32-33.
- (8) 松本、前掲書、124-125頁。
- (9) 坂野、前掲書、345頁
- (10) Nguyen Khac Vien, *op.cit.*, pp.91-92.
- (11) Lê Thanh Khôi, *Histoire du Vietnam des origines à 1858*, Sudestasia, Paris, 1981, pp.336-337.
- (12) *Ibid.*, pp.340-341.
- (13) *Ibid.*, p.341.
- (14) N-D, Lê, *op.cit.*, p.35.
- (15) ここで“相対的成功”と言うのは、絶対多数の改宗に成功した訳ではないが、他の東南アジア・東アジア諸国ではフィリピンに次いでキリスト教徒が多かった事実による。
- (16) Georges Taboulet, *La Geste française en Indochine; Histoire par les textes de la France en Indochine des origines à 1914*, 2 vols., Maisonneuve, Paris, tome I (1955), tome II (1956), tome I, p.331.
- (17) どれ位のキリスト教徒がこの反乱に参加したのかは、歴史家によって、著しく異なる。ファン・ファット・フォンは70名、その内40名は子女で、戦乱を避けてサイゴン城に避難した者と言い、シャシノーは1200名のキリスト教兵士、レ・タイン・コイは約200名、タブレは499名の捕虜の中で66名がキリスト教徒と述

べている。Cf. N-D, L&, *op.cit.*, p.91.

- (18) *Ibid.*, pp.90-91.
- (19) *Ibid.*, p.92.
- (20) Taboulet, *op.cit.*, tome I, pp.332-333.
- (21) *Ibid.*, p.335. Messieurs Miche et Duclos à M. Barrot, consul général à Manille, de la prison de Hué, 18 mai 1842.
- (22) *Annales d'Association de la propagation de la foi*, 1850, p.370. (Lettre de Mgr. Pellerin, coadjuteur de Mgr. le Vicaire apostolique de la Cochinchine orientale, à MM. les Directeurs du Séminaire des Missions Etrangères à Paris, Hué, 26 novembre 1848.
- (23) Vo Duc Hanh, *La place du catholicisme dans les relations entre la France et le Vietnam*, 2 vols., E. J. Brill, Leiden, 1969, tome II, pp.17-19, Mémoire concernant le Tunquin et la Cochinchine ainsi que la position des Missionnaires.
- (24) G. Taboulet, *op.cit.*, tome I, pp.385-386.
- (25) *Ibid.*, tome I, pp.386-387.
- (26) *Ibid.*, tome I, p.394.
- (27) *Ibid.*, tome I, p.405.
- (28) Vo Duc Hanh, *op.cit.*, tome I, p.38.
- (29) Taboulet, *op.cit.*, tome I, p.415.
- (30) E. Louvet, *Vie de Mgr. Puginier; Evêque de Mauricastre, vicaire apostolique du Tonkin occidental*, Scheneider, Hanoi, 1894, p.154.
- (31) Vo Duc Hanh, *op.cit.*, tome I, p.313.
- (32) Taboulet, *op.cit.*, tome I, p.83.
- (33) N-D, L&, *op.cit.*, p.26.